図書館だより

2014年　夏号
発行　春日井市図書館
TEL　0568-85-6800

古来より私たちは怖い話、不思議な話を語り伝えてきました。単に暑中に涼をとるだけではない奥深い魅力があるのでしょう。
今回は怖い話に焦点をあてた4つのジャンルの本をご紹介したいと思います。

特集　怖い本
～怪談～

『新耳袋』シリーズ　第1夜

木原浩勝（きはらひろかつ）/著　中山市朗（なかやまいちろう）/著　ﾒﾃﾞｨｱﾌｧｸﾄﾘｰ　147/ｼ/98-1

怪異蒐集家である2人の著者によって放たれた実話怪談ブームの火付け役となったシリーズの第1巻です。
現代の怪談や怪異譚を百物語形式で99話収め、そこに目次に書かれていない著者の体験を1話加えて100話としています。
ストーリーは背筋がゾクッとする話から不思議でちょっとイイ話、何だかよく分からない奇妙な話など豊富なのが他の怪談本と違うところ。
怪異はあなたのすぐ隣に潜んでいるのかもしれません…。

『嗤う伊右衛門』京極夏彦（きょうごくなつひこ）/著　中央公論新社　F/ｷﾖ/99

『四谷怪談』を下敷きとしながら、新しい『四谷怪談』として現代に甦ります。
美しかった顔の半分が崩れても自分を見失わない岩。そして実直な伊右衛門。不器用な2人は愛し合いながらも周囲の思惑に翻弄され引き裂かれてしまいます。
愛する夫のためと信じてきたことが全て偽りであり、真実を知らされた時の「なぜ伊右衛門様は幸せになれぬのじゃ！！」と絶叫する岩の姿は壮絶であり、私たちの心に強く響いてきます。そして、物静かで笑ったことのない伊右衛門が「嗤う」のはいつなのか…。
人間の「業」によって、2人が迎える悲劇的でありながらも切なく美しい結末は涙せずにはいられません。

暑い夏…

“怖い”ところへ行ってみませんか

『ニッポンの洞窟　暗闇に息づく神秘を訪ねて』

イカロス出版　　291.09/ﾆ/12

暗い、怖い、おまけに寒い「地底の王宮」洞窟を探検しませんか。

日本各地の主な洞窟の種類や成り立ち、魅力、そして楽しみ方を初心者にも分かりやすく紹介。

さあ、摩訶不思議な空間、光届かぬ地底世界へ冒険の旅に出かけましょう。

『新・廃墟の歩き方　探訪編』

栗原(くりはら)　亨(とおる)/著　　二見書房　　523.1/ｼ/13

人間が創りだした建造物が朽ちはてやがて自然に還ってゆく…その刹那に存在する「廃墟」の魅力を解説。

廃墟探索に関する注意事項に始まり、日本全国を７つのエリアに分け５６ヵ所の廃墟を怖い写真と文で紹介。廃墟という異空間を探索したくなる一冊です。

『超常現象　科学者たちの挑戦』

梅原(うめはら)　勇樹(ゆうき)/著　苅田(かんだ)　章(あきら)/著　　ＮＨＫ出版　　147/ﾁ/14

人は常識では説明できない現象に怖れを感じます。ＮＨＫ取材班が科学では説明できない超常現象解明に向け、世界各国の科学者を取材、最前線の研究をドキュメントをまじえて紹介しています。

本の中で世界の科学者と共同研究気分を味わってみては？「心霊現象」「超能力」のイメージが変わってしまうかも‥‥‥。

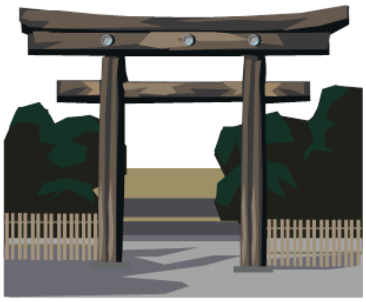
『にほんのお守り　願いがかなう小さな神様』

中津川(なかつがわ)　昌弘(まさひろ)/文　　広田(ひろた)　千悦子(ちえこ)/絵　　徳間書店　　387/ﾆ/10

みなさんは “願いがかなう小さな神様” お守りに何かお願いしたり、そっと背中を押されたり、小さな勇気をもらった思い出はありませんか。

日本全国のお守りの由来、ご利益をいただくための作法や楽しみ方をかわいらしいイラストと文章でわかりやすく紹介。

お守り片手に、怖～いところへ!!　いざ、出発!!!



妖(よう)怪(かい)

妖怪―人間の理解を超える奇怪で異常な現象や、あるいはそれらを起こす、不可思議な力を持つ非日常な存在のこと(Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより)。日本人にとって、古来から妖怪は親しい存在でした。情報社会と呼ばれる現代でも、マンガ・アニメ・ゲーム等、私達にとって身近な場で活躍しています。今回は、その中でもちょっと変わった妖怪本を集めてみました。

『妖怪変化―京極堂トリビュート』

あさのあつこ他/著　講談社　９１８/ヨ/０７

現代の妖怪界を代表する一人である京極夏彦の代表作『京極堂シリーズ』をあさのあつこ、西尾維新といった豪華作家陣が書いたパロディ短編集です。ゾッとするもの、ちょっと笑ってしまうもの、それぞれの個性が出ていて、これだけでも読めると思います。私のおススメは、‘柳家喬太郎’著の「粗忽の死神」です！

『名古屋力―妖怪篇』

山田彊一(やまだきょういち)/著　ワイズ出版　Ａ３８８/ナ/１３

「何故、尾張名古屋は古い町なのに、妖怪話が少ないのか？」この本は、そんな疑問を持った筆者が実際にその場所へ行き、調査し、まとめた本です。矢場の化け猫、八事興正寺の七不思議、守山城～竜泉寺までの負のエリアなど、自分が知っているはずなのに知らないものがたくさん出てきます。名古屋についてより深く知ることができるかもしれません。

『妖怪セラピー　ナラティブ・セラピー入門』

芥子川(けしかわ)　ミカ/著　明石書店　１４６．８/ヨ/０６

現代は、悩み多き時代です。老いも若きもどう生きていくべきか迷っている・・・そんな心の問題を解決する一つとしてこの本は‘妖怪’を取り上げています。もともと、妖怪は人間には理解できない現象を具象化したものです。本の中で悩みの原因に妖怪という形を与え、彼らとどう付き合うべきかを一緒に考えます。人間ではない彼らだからこそ気楽に付き合える・・・妖怪は今の私たちにこそ必要なものかもしれません。

ホラー小説

怖いと感じるものは、人によって千差万別です。目に見えない得体の知れないもの、不吉な予感、人間の内面に潜む悪意、狂気、残酷な犯罪。実際に経験はしたくありませんが、暑い夏に怖い話はいかがですか？

『七つの怖い扉』 阿刀田高（あとうだたかし） /(ほか) 著　新潮社　918/ﾅ/10

7人の作家（阿刀田高、高橋克彦、小池真理子、乃南アサ、鈴木光司、宮部みゆき、夢枕獏）による短編集です。
短編なので、これからホラー小説に挑戦してみようという方にもオススメの本です。それぞれの作家の特色を活かした恐怖が味わえるので、あなたにとっての怖い話、好きな作家が見つかると思います。

『八月の暑さのなかで』 金原瑞人（かねはらみずひと） /編訳　岩波書店　93/ｲﾜ/10

怪奇小説で有名なエドガー・アラン・ポー、「チャーリーとチョコレート工場」のロアルド・ダール、海外のショートショートの第一人者フレドリック・ブラウンなど、英米の短編の名手達によるホラーのアンソロジーです。
ただ怖いだけでなく、面白い捻りの効いた作品が揃っていますので、最後の一文まで気を抜かずに読んで下さい。児童書と侮っていると、ゾッとさせられます。
第二弾のこちらも読んでみて下さい。不思議で不気味な展開は読者を飽きさせません！

『南から来た男』 金原瑞人（かねはらみずひと） /編訳　岩波書店　93/ｲﾜ/12

『黒い家』 貴志祐介（きしゆうすけ） /著　角川書店　F/ｷｼ/Z

保険会社に勤務する主人公は、保険加入者の呼び出しにより訪問した家で、少年の首吊り死体を発見してしまう。それに疑念を抱いたことから、主人公の命が脅かされる恐怖の日々が始まった――。
保険金を手に入れる為、何のためらいもなく殺人を犯す人物に執拗に追い詰められたら…。現実に起こり得るかもしれない人間の狂気に背筋が凍りつきます。
かなり怖いので、読んだ後で悪夢にうなされるかもしれません。寝る前には戸締りをしたか確認をすることをお奨めします！